蔦本集

みち彦撰

へ 5
1842
2

蔦のもと　秋之部

立秋

松とふまもりて涼しや白路の蜂

文月や虫の家とよむ嘆く片

蟹の子は影は生ん秋のくつ

三日月の入の妻や扇ちく

七夕

星の朝せきとゞめぬ筆もなし

蜩をよ起まてまておもしろ雪

妻恋しまつのあれてしや火とり虫

隆辰芸面にありける席上之をみれ
ともかうしてよみ青をいしむ

親人とて七葉の梶を出さまほし

さゝしとて星のしはくや鏡に髪

一つふ津てふ銀河のこゝをとまるらん
うちかゝる小女子戯る

聲のあきて置おもひかるの星

星ふりさよ色あせ露の破はしろ

八日の朝の子ならへし志て見ぬ彩鶏に
こぼれおりし衣みさく此いとろ

具風にてよむさへ涼しおもしろの歌

はなきおもそこちと皮るや盃用を

いとけなかりし背を失ひける年

人到るゝ雀ハゆくへの宿

萱売に花ある真菰や枕の艶
艶のよたしも花れ家に

たまやこの盆借てゆく都しもの

むかし種筆ハ紅也父まゝん

迎火や裏家背戸家も子の戸ま

とある家にむかし火見へ峰雨る

盆足や粉ぶ末印ゐも煙出つ

妹かまる菓子姜よりてまむしろ

日本武の声いさをしき宮に感し
奉りて清く光をむさしのを越る

螢火や留北青の縄かゝる綵打る

稲妻

いな妻や大根蒔ける首出つ

糯つまや猪もて余ん中にも

稲妻や鶏ゝ堂ハ人の中

いなつまや揖斐の峯のきれ〳〵に
稲妻やすゝき流るゝあるゝ花

露

いつとても猿しかれよ露の秋
志ら露や人にまかせて起人す
見送志らぬ世の華や草の露
夕かけや草もぬらさぬ露の玉

峯留の中にもちるや秋の露

情の余りに感さわ流るゝある時は
うかれて眼にゆるふおもてを濡らすに
何のつきて白きものつやくしらんを
のこんかと疑ひてハ

下露やこれハ夜啼鳥の毛

無従上人をいたむ

野露の佛とさしく睡りけり

月色の露かゝるも秋ぬるあり

七夕も来ぬまにやちる木槿かな

人に知られぬ人を入るの作試みんと
大原の芦麿かせむに

百年は木槿にまかせちる木槿

背戸の秋互にちらすのむら萩紫

ちる柳芦も穂に出ぬそよぎかな

萊

朝かほも日毎はさかぬ陸打戸

暮かけすゝしや濡縁のもとを竃

胡息に出の月見てあそふ戸哉

宗因は夏まくらあそ

朝かほは素もたえなん秋の夜

其角はまた秋

秋きくに光せし春や山の草

ひやゝかに野分乾くすゝきかな

泣ゝまゝ尾花からまる窓庵かし

日ぐれも日ぐれは寺の尾花かな

女郎花

まぼしきや冬萩の露きえぬへし

然なるまゝ似つかぬや女郎花

去かくて蝶ふさん女郎花

きゝ馴へし何のすゝきに雑魯かな

眼瞖ゝの衿の浮気も持つ経

知る者は少し口をしき

萩の夕星の金波もあかけむ

果なやき都の能や萩の露

不定なる雲もなしや萩の花

もとより其交の門に入りて

化粧をはねる

小車やきゝやうや庵の七草寸
尼になりし人ハなれし草の花

虫

なく虫の中へ住こむ宿の奥
尺る紐の小石ハ杵きこしけ
五虫ハ寄せて先にまへ中にも松虫轡むし
のぞ違へぬハ様世にあるまじくるにや

一聯両趣

轡虫よなしきりふる声きこぬ
松虫よなく月にふく秋ハせぬ
か波きり比背にもおもき轡かな
月
草も実りまてなきれいなる花
芝刈るやしの声する蜻蛉かな
蜻蛉の蝶をとるや舟の五器
萩折つ屋をまき紐つ小鷹狩

まつ月や烏帽子着たる人のうしろ影

月よさに送られし犬の伊勢参り

月の雲折ハよわれる夜の庵かむ

あさき泉ハ月のとまるを流れける

八十まあてゝ命やいく度月

大原や月にかたむく家一ツ

訪む坊の里四睦のかくれ家にて

男子も嫁子も見きん二の月夜

雲の月ぬるゝとも後や話坊の游

待宵雨祈祷

岩本家や鯨も琵琶をあそびけ

待宵や浦島か苔のなかしせん

来宗さの十五夜見へき大川宵を

良夜

けふの月さてもをしまぬ光かな

名月や小ぬかこぼれし臼の跡

淀月も影けし雲か駒の星

たのもしやまつかの家の底ぬ月見

看経のうし終はしや夜半の月

月見もよふ人まつあさき庵の扉て

売たは人をこしはやあれし蕭然として只
東壁に渡酒巾をつく

待人もあまた来らん月の宵

うし終をあはれしは大悲閣の漏りて
この十時房は其の終を人あはれけめ

うき枯や菊の家中と寝あらん

菊と宵その東さん見も努かや

あは作の風雅にて折ふし望の日
いくかいく人のとはひしつるよ

十五夜も暮れゆき杖の菊

十六夜

いさよひも出のたき　吉連り

十六宵や一男もちし　松ヶ浦

いさよひや志らぬ古人に　来る人

走汐や雲の中なる　坂架ミち

汁かけのけふも飯や　北斗　吁

蛸の暮燈火に秋の　只え　神る

小春に出菊の咲し　野うら

うそ寒や比庵らしさて　越人　遠

家家の鏡しらなる夜　宗さ

あらはに暮目　百ぞ　東きヶ秋

先陸の橋な月すむ　東きヶ峯

甲斐かねに身をしむる夜をさらし

家蔵の白髪したる東寺の雛

荒れし傘の音きく夜寒かな

砧

唄なきハさ様すなれや小夜砧

河内路や情をしつて太郎か打つ

古詩体あまさよろ心うつるよ

傳兒あるや空にあけて衣うつ

乙鳥のけしきなる紫荊かな

すゝき野菊ハ折枝もなし

おもしころ菫虫の眠くし法乗なり、

芦の穂に里離れする雀かな

荻あし刈修や手まつ　水滸傳

大蓼のくきも　程や稲の形

此やくさ地をとよる百や紫蘇の花

唐からし　戯れ空の色のあかさ

坊か手まよきし麻さそうぬうこ飯

黍の中嘘寛して　詠か来る

抱へまゆる扇あつうき黍の出来

稟の積より穀物のあらく家

二世安楽と書き表小寺の

鄙びりあるべし

布佛の扇にも一把稲　玄秋

須磨ありさて扇あ年　秋田つり

早稲の積や雀もえしぬ　坊か作

子稲のあらや縫も眠りさるさも任るら

早稲千ほや庵も小屋よ罪手香
稲かけてもしほあるのも川裏

案山子

かなしほよ案山子か立る山の田
川案山子との山あり久しぶりそ
案夜や門にかくしたる並ぶ
田の畔案山子に袖をかへしけり

鳴子曳里に来るなり声すなり
山かせやとこの鳴子のもみ雀
鳥悟の番人さきに用ありて縄をひき
かへしてあれかちに田あちきまぬよ
要電かぬ田のとなり人よとの鳴子
人の家人業あるか山の引板

鹿

童部のくまりかけり鹿の声

紅葉ふむ鹿ハ見えぬ鳴にけり

萩の声月さし入て澄夜かな

小畑に鹿の音しきる宇庵ろ

雁

广ろのや星の傍りにある日比

霞の中はあハきこしさや雁の声

声つゝき雁ハ江戸に雨夜かな

きつ丁や高嶺をかゝる あへん去比

雁鳴や田中のしき水に渡しかな

ふくゆき孝膳さきし駒の時

駒の声惶の苦ん蒙き郡にする

鶉鶴の半ゝさる可て来や花の後

晩けて家にくゝむらてもあはれ哉

立晩に井ろく小家のうしろかな

餅つくや馬の家にやかて鞍

后月

吉野の奥より出へ後の月

後の月山里ちかく菊ちる

木枝くたま娘はすゝ十三夜

後の月片母持しおり後か

待須主としてはふ文をとき

十三夜や六様あるき懐子窓

姥様まちれしく中は常かり

居の月後や二人かまた視

日本の坂素つくろふ志ふしてし南
京よりあるきにあらくあとまゝかへり
たゝむかの言れいかの仲秋の月みもいらぬお
よう侍らんと此波の草史の描うるま

升市に素足で泣しり五郎丈

長月の枯や小松も荒てはく

家毎に川戸の口あけて蜉の山

一翁上人のうやはり
まねかれ申て

炭きく水も枯すむ昔のうへ

蜉の夕や柿喰ひなから秋の庭る

さひしさや蟷にまきまき山の匂

秋日代さま秋冬にしそいつれは
うまかれ人

耳にはく草鞋の音や蜉の雨

撿挍の蟷斧に香とる蛛の匂

菊

打をし花山名や菓の遍きは

閉まりや菊咲よくの浮世哉

莫嗔野店無肴核
博酒堤沽豆莢肥

不二すむや菜の日和を翠みて

来くの春にうらてせうらおの硯

萩萩に泣あきられし菜の花

菊の香にあらためてしや月夜さし

小さき暖日おりにおりぬ椎のもと

声ゝ菜にかくしまろ十日ゑ

碩布の山住にて

ふいきいく添菜や来くの花

やさうハ委皆の獣をいれしにてすゝくハさむ箱の蓋ゆゝしの板を串の頭にゆしうそく容に立たく山畑みとよ絶るやさきためと是なり

焼鳥ハ焼る菜ふも死ぬ身かな

百合や眩るゝしき末の菊

みちのくの百非坊一きうの菱旅をゆるうし白川の関おほつかなく

て長月のころなりしと紀房上八

ことさまれ

うち見ても菊さへよそに残れども

紅葉

傳教のめでゝ法見ゆる紅葉かな

すさましや紅葉を深き露の色

出ぬ人もなかりける御柿紅葉

振る嶽も筈あらし渡るや小坂越

小坂越八木田の金山を左に出ねの西へ趣く
一条の瓢箪とニつ有り旅人覚ありしと歟

梅てらす紅葉もみや筈の宿

ひこさ寄て掃姫らぬ下も筈

うつ柿や木末ちりかゝる濱の町

むかし婦の小濱あらし今又[illegible]

濃[illegible]ん村の小濱すの門の林

刈あとの葉にもゑむや山の栗

さひしさや蘭のこほれ庵さまで

行秋

けふ蛉や松葉こほれを手持ちて

ゆく秋や鴫の羽根繕くれくし

出湊に見る舟も行けり秋暮る

はこふもみるもあすまで越の秋

今紀年にも肯ひ余り九日に来をられぬると長能の歌もおほえおきたるよし石浜かあられけるにも人々に尤ありけるに

蝿も死ぬ峰の霧や九月尽

人として酒のまぬ人夜の猿とせしほしけの十七年見帛にも孫の人放ちぬは行りし空の幻におりつくれさけれえ

さくやさゝ新酒はくまし　白雄来

蔦のもと冬之部

時雨

麦層の畔もちまる志ぐれ哉

あま数の宮も萬家もふる時雨

志くるゝを夜こそありしを嵐の字

米母寺ハ志ぐれも東への方志ぐれ

清白の愛探ことゝ云かゝけの

阿等をよろこ数

脇すまで時雨の旅のはてしまで
灯もおりてよしあるまや神無月

霜

霜かれや生姜も植てある小庵
霜の花ま探えりける草色かな
走もの浦山しくもなりにけり探

越の亜ふりを

寒霜や日雇出てゆく物五十
霜の葉ちりまて菴をとしめる
花芙蓉さてし草とみ清も霜越し

ふりくへ八秩父の岡に宿りけるよし法ること
たまひとこ之くれ 公私のかたかな空
山帰地若干多く便了まりせ力了
かなへてまくはかなと刈けるを冬姫山
と云さて人目も草もとよ見ゆりける
山里のいうふきもし

おく霜や扉もなかりけり 禄山

昨もあき萩の垣根のちぎれ雲

野あそびに出て戸させし小春かな

芦の家のとく〳〵あきし小春かな

こがらしや雲水ていふ草鞋とく

寺遠る鐘のうなりや冬日かげ

冬ざれに出ゐる富士の傘かな

此句は冬月に出でる宮しき呉竹の
呉竹に遊びて見ゆる冬れめるや宵月ん

冬の月枯の下みち 又ゆかし也

只すゞにすゝに小さくし冬の月

月も見え努十夜参りの背中法士

竹葦實麺

忘れ會や友を連来て従明る

像前に反るゝ行ふく〳〵ぞろう

芋りし〳〵ぬを

ふる霜のはれさても雁　翅枱

よし原の四のつまちくさくおの色
金今かとしふあしは

翁忌や菜も花深かりしもの

小千谷由都留亭時雨會百貞善頭

會式もくるまでもなり翁の日

黄此寿律をの神雪ハ以くまは

人も合器もちりとけてさて納豆汁

よしあしと見ゆる家もなし冬の　搆

野のなく沓戸田へ千里冬の門へ

玉阿　売人の古末手利に
となほ名もし　白

男めり鯨そ法りもあしろ与

押並べてうるまする　烟代与

うそ人日の仕舞もなしかあし　絵守

すたるのよはを亜続とかう之定
めていふ蘇枝の指をうまつる孫
を遍る人さまじきやせるハる
雪のれくり

揩のはよとく嫌ずよう　甘し名を
揩よ痲し旅人　猩み寄り　ありまは
名をまさ经まさ山色のきりよ手寛さる
画　展よおもて大桶ハ　ちうよし

草庵の宍深を旋さしる附

巨蛙うく痲のゆくさへもりれき
あやこし蟾蛉を痲も抱ふうり
川むちら越る佃密お見る張家の言れは
よ江戸積のものぞおそうれしも走り
余千代斬も　さやう　佛　やう
日経むしの社そて
陸さきや雪夜の姫を　恥す
雪夜ふん刀角の袖積　葉了さ

麻靈庵か此年の冬を
訪ひしけり

野衣二ツ先に負しに着經し
うちの者ハ六ツも七ツも 喧年
ふゆしとさけるるよ

かくて歩ミし家をさるゝ 時の名
野衣着ん留る式 頭書也しけり
蒲生見て麻すや小さくも持仏堂

炭竈にゆきくふけし 月はうら
きえ火 着物のふくれ多 岸の敏

日の清らに此海清水色なし 石落の花
小文庫 守旅 法等の調を学んとて
加賀の耳谷にし

かり寄て 木馬するや 桃杞の花
黒田川に妻しある家をとゝ着て 吉日余り
蕣丘あまる浦人の亭に 俳諧をいとなむ

茶山花を打ちて見たり爪の仲

茶たくさえ見ては夢や古茶木

うつくしき人まづ来れ枯尾花

水鳥を見て見る人まもなくうれ尾花

枯菅やゆふべ犬を呼ましら

菜からや佛の世も一つけ

さくらの花を結ひしが京にある家
筆墨を研ぎてゐるとて

唐まで隔てられし茶も出されたる

枯あしや雲のちらちら風の路

芦ふむ波に人目も気にかかり

たちす紫のあまりとし見て枯りける

大さ紫の京にある人きの扇を妙扇の
両ゐ亭に投しける時

扇も拍つかれての倖まなく

なハとてあまも枯らかれかしハ
天竜の喧嘩さゆるかれ来ぬ
岩波のやさし緑淀川最上一の
急流とうや
岩波や水に追れて花木の葉
木葉ちれたけちら紀年も山須免く
懐ろ来まあらて根古の落葉さ
落穂も落葉ふりかられと

みさはらや猶掛までもむら落葉
綿の雪を人芦葦等こそりてこそやく
上手あふらんと息をおへるう
まりたの麦杭あくし麦を蒔
参されやさそ縁舎の麦たうけ
落麦刈に居るうれた滝のうへ
稗刈し緑のくえ無る山の雪

大の字も干さ敷や芹かしち
枯なとの茎引残りすて畑
葱ふし波ての冬子な教なとよ
鶴の径長しとなくり冬田つゝ
冬ゞ又ぬ田町の穴のこゆると

水鳥

水鳥も爾縁さまハ見ゑくしや

水鳥独入まくりたり　津久井縣
鴨なくや雪ともちも南志け
寒鳥のあかくまくや冬の杉く
鷲鴨よ霊山の歩代乃鳥なるらん
小鴨ふも余所としきや都鳥
水鳥の座鳴よ乗進て聲さむ汝ず

千鳥

まづまは八嶋の生葉残りつゝめ
鶺鴒も二三度たし秋手るさ
舟の冨手にる沖洲走りえり
咄鯽り手る尺よあつ薄月夜
猿も来つゝ秋星ゐちとりやで
手る婦や鶉け一人束るべし

冬更て寺中蓑鍔よさゆろ也
一菊割し絲すれ集るや冬の夜
こゝろゆゑの尺さし とをしく 奴とこ汁
河孫のつゝ帰し こゝよ八 おりよろう
ワきあそ八おりひ出さんと云ましうる雉ゟ
ふきよりうけ出て めを頬にける盛を
まきくりや乾鯱きらに 望の行

くり鮑をよしくはゝ　佳舞り

みしか夜のかり合する　登至り

孫晨も扇處りえん　名もゝ冬

子飼ひ手よられん料の紫　北槽

祢宜殿をゝり寄せや　大坂　儀

さゝほさの葬死ぬ余りまち　鼓

待きゝさ明家あしさも有山中しま

定盛もさらゝや雲作のみし　法蓮

雪

白川の雪や入院の僧乃禮まとり

初雪や宇治の小茶緒のけむり　釜

雪国のさくれしハるゝて　茶の里　りり

米のまれを方する　積や雪のくも

くもの雪刀根もかへるか鴨の帰る

雪の日やゆかしき家のけふり

雪風や鶴の目つきは呼ひさき

鳰なくや雪になりきるあかつき

雪になる風を北にしなく鶴

一葉の清貧を尊とむ

塵とては梅の古葉と庵の雪

雪の日や鹿の声通る潭の町

豆うつや扈も由来の音

雪国を太いよは大事の法架か音

若菜雪にとちて江鮮の寄物おもむゆる

金沢にけふ出せる諸侯の讃に

京町の去ともかれ袖の雪

古寺や天井浮ぬ雪あかり

伊勢の空も兼て白し あるゝの降ける雪

山里や雪さへ晴れて霰降る

あられふる篠のまくらや千々におりさ

馬酔木思ひ出ところに枯ぬるを千児女か
井八かしら尓見ゆる

みそさゞや雪にあれたる小笹原

山田の畔の枯すゝき刈人待つにや
よめるにもよろしからん

刈人も来き絶芦にあられの音

冬の雨ふるも先にさきたち忘れ

禅門の萩をりし寺敷ける那

うきしろ嵐野のあらし散るや

春風も飛ける雪のゝの入

折つも波よしかる綠条の梅

死なれたる和尚に精よ念ふ椿

裏家仏子の声なつかしさまほしかり

老懐

髪をそらん事もしらるる年の昔哉

世の中は誰かれか会ハとしもやま

世の中ハ左も生きる餅のさハさかな

花売を売花の鐘をきく鉢

煙線ハいつもなまよりとし用意

明しきたらる家の年の男之

其ままへてさへらし年の市

うハ並の千葉剥むかしハめ冬とむ
え鄙ぶりかたへしいまハ名のみ水
のくともよそれぬ譜代ともの匠なし
其もかくて麥つく臼のかけまで座位こなれを商
おもふに髭先に座まよひて肩つるまで
三世のちなくしおもられて兎角のあし

されはこそ鬼追ありし庭の事か
こゝを猪子明日の俳諧せよと
云けるに旦坊に来ては
鬼よりも先さきせん篝の豆
すゞ下り我心ちせぬを豆まく夜
春と云ものまほろしにも見えん唱へ給
まし比先をともおもえは
小窓ゟ見てもゆるや年越も
色見えぬ硯洗ふて年こもらん

待得たる花ハ是れこそ年
松の葉も幕にあへて年の塵
梅も筆とらへて當を席に年
としの夜やむかひ合ふ樹のかゝる清

三国嶺三社権現詣来

赤城をおろして出るの岳折
ふりを明し奉る

月雪うり渡る清ときに見出中

深山人むかしはありていはよく跡の
寛はいろんなりき

鶴の巣たゆたふもとめ丈人かな

諏訪の湖紛ハ時折の橋わたり
まいらんと思ひあてたるなりき

古峰ともに無念の神よくへしませ

小木谷より長居へ送り中旅中清れ
中ろかさうるあり彼の草地坊をえ宿田の
見人丹しこむ

茸とり鍋も丈よ栃の書

六人舎かなんこまり嬉し雪の皆

この道筋うへき清く丹のうるさ
まさりなかるへ人よ出るもとお頼しき
小ちの休らふ人あまた比れハ行ミ悪き
ミ中ハされなれしミ中りれハ休ミ並ハ
旅なるそこ文間られ市村羽反つつ
花の風立る時の気りしてきつ出と並う
墓ハあれまてなへるとも中らハいよ立和せり

ありよくとても時宜の佛に逢
都鐵の山寺に行てまゐりし事を進
の庵をとゞめておゐてほしき茶をおくりつき
はらはかられ席の紙兜の菓子をまゐらせ人
よそのむ庭のあ中しく此ところしれおも
前世よりむかし後世の楽しからん程
こゝろえひあてゝ来る時の苦しみをいはゝ
その後下る時の安からんをとゝて波あ
て汗をなかしてもありかく
あかくしくて来てまゐられ　幾ゝ生に

草葉もる丈草の貧に徳ありと
いえども又一長物生
見ても捨るゝれや波ての　かゝれるの
ゝ一本の花の波の花ゝまゝ
山路をわけゐて雲の人の志似をこしらす
人世莫為婦人身
百年苦楽因他人
きゝわけのまゝを解しても才発あるものゝ
すゑは肘火の手となりて一里持の

きしつる都のかたを梅まで
小姫のた浪もふいましたんとて二河物
ありつあへる旅も野又あかり
墨もしめ硯すゝる風　玉をとらす
まいらは文字有するかたしと見へ
きり娘のうれゐことゝもまへんりしめ
もあく粋ひあかる人をあくやけきの
古来よしあらつき清朶年の雅号
知しれをあく考討ちしたかとて
あかつや縄もむすそぬ世のたゝめ

角田河四時

月のうしてちる花見をや角田川
苗しあてる目りふ穐もちゝる浮八
三日月も見て穐ある雨北隅田川
月雪を摘てまつりし墨田川

俳諧書舗
江戸本石町
西村源六